
彼岸花

ジラーが笑った日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼岸花

【Nコード】

N7160M

【作者名】

ジラーが笑った日

【あらすじ】

自分が嫌いな彼岸花

私が枯れるのは、10月。

その後は・・・？

私は水が好き。人は私を忌み嫌う。地獄花、死人花、捨て子花。ただど水は私と話してくれる。命をくれる。ふと思う。

「水は神様なのかもしれない」。誰にでも優しく、心地よい。まるで私と正反対。私には毒がある。水には潤いがある。私には死への道がある。水には生への道がある。昔はまだよかった。ちやほやされる事は無かったけれど、人は私を嫌わなかった。

ある日、雨が降った。水に出会った。私は、

「おひさしぶり」

雨も、

「おひさしぶり」

私は笑う事は出来ないけれど、とても嬉しかった。雨が言った。

「君にいい事を聞いて来たよ。ある人がね、君をよい事が起こる兆しだと言っていたよ」

私はしばらく雨が何を言ったのか分からなかった。けれど、すぐに幸せな気持ちでいっぱいになっていった。「私の事を、そんな風に」
「それともう一つ」

雨は笑うようにぼたぼたと降って言った。

「君の花言葉は、再会。また来年ね」

十月に入ろうとしていた。私はもうそんな事は気にならなくなっていた。口に出して言ってみた。けっして強がりではなかった。

「枯れたっていい。雨がまた来年と言ってくれた」

私は枯れた。

四月。私は地上に出て来た。人はまだ私が私だという事に気づかない。雨が降ってきた。

「おひさしぶり」

幸せだった。

「おひさしぶり」

五ヶ月が経ち、花が咲いた。人が私に気づき始めた。もうあまり気にならなかった。ある日、女の子が近づいてきた。

「綺麗な花」

そんなことを言われたのは初めてだった。

「持って帰ろう」

花はちぎられた。私は上に行った。

一面の彼岸花。水に出会った。

「また会ったね」

（後書き）

彼岸花の言葉、ひとつひとつ、人によって感じ方が違うはず。
あなたには、どう届きましたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7160m/>

彼岸花

2010年10月21日21時38分発行